

三品彰英先生を憶う

水 野 恭 一 郎



仏教大学教授三品彰英先生が逝去されたのは昭和四十六年十二月十九日の午後四時前であった。私がこの訃報をうけたのは翌二十日の早朝で、関西大学の横田健一教授からの電話のしらせに、全く青天の霹靂のような驚きにうたれるとともに、しばらくは茫然としてそれを信ずることができないような思いであった。とるものもとりあえず先生の御宅に参上し、永い眠りにつかれた先生の枕頭に坐して、はじめて大きな悲しみが現実のものとなつて私の胸をしめつけ、いうべき言葉もなく、ただ痛恨の涙にくれるばかりであった。

先生の元気なお姿を私達の周辺に見ることができなくなったのは、その年の夏のさなか八月中旬の頃からで、その後、先生が腰痛がひどく府立大学病院に入院されていることを伝え聞いたのであるが、それほど大したこととも思わず、また先生が入院のことを秘せられ見舞客を固く謝絶されていることも知ったの

で、押して病院へお見舞に参上することもせず、折にふれて御家族を通じて御様子をおうかがうにとどめていた。ただ、その間すこし気になったことは、先生の御容態についての御家族からの御返事に、快方へ向っているという言葉が一度も聞けなかったことで、そのことに一抹の不安の念をいだきつつも、まさか最悪のことが起るなどとは夢にも思わず、退院の日の早からんことをお祈り申し上げていたのである。しかし先生は遂にお元氣な姿を再び私達にお見せ下さることなく、浄土の人となってしまうれた。先生の御病氣が実は死の病であつたことも知らず、親しくお見舞もしないままに、お別れの時を迎えなければならなかったことは、今なお、ほんとに悔まれてならない。

昨年の暮、先生の一週忌の法要が営まれた際、御遺族から一枚の色紙が参会者におくられた。この色紙は先生が府立大学病院に入院後間もない頃に病床で書かれたものとのことで、紙面には、「拝無量寿経」として、無量寿経の中の一句「独生 独死 独去 独来」の八字が記されていた。このような色紙など今まであまり書かれたことを聞いていない先生が、病床で特にこの句を選んで色紙に書きのこされていたことは、あるいはその頃、先生はすでに御自分の死期を覚悟しておられたのではないかと、今さらながら感慨深く拝見したことであつた。

私が三品先生の聲咳にはじめて接したのは昭和十一年京大の二回生のとき、史学科陳列館二階の教室で朝鮮古代史の講義をきいたときであつた。その頃、先生は三十代の半ばで、本務は海軍機関学校教授であつたが、京大講師として毎週舞鶴から出講しておられた。頗るお元氣で、明るい活気のある講義であつた。その後、太平洋戦争が大方はげしさを増した昭和十八年六月に、はからずも私は三品先生から迎えられて、先生と同じ海軍機関学校に奉職することとなった。同校には私よりもさきに横田健一君も奉職していたの

で、それから終戦までの約二年間を、先生・横田君・私の三人、同じ機関学校の教室で過すことになったのであるが、この舞鶴での二年間の生活は、殊に戦時下という環境のもとで、三品先生と私との生涯されることのない交わりを深めることのできた貴重な期間であった。私が機関学校に着任して間もない頃、のちに先生の学位論文となった『朝鮮古代研究第一部、新羅花郎の研究』が出版のはこびとなったが、これにつづいて朝鮮古代研究第二部にあたる『始祖神話の研究』の稿を進められており、きびしい戦況下にもかかわらず、先生は毎日欠かすことなく教室で原稿用紙にペンを走らせておられた。この原稿は三省堂へ印刷にまわされてのち、戦災で焼失する厄に遭ったのであるが、その一部は、焼残った校正刷をもとにして戦後『神話と文化境域』と題して刊行された。また毎週金曜日の夜には先生のお宅で研究会がもたれ、私達のうち誰かが研究発表をしたり、毛詩や満濟准后日記の輪読をしたりもした。きびしい戦時下の舞鶴にあって、なお変りない学問的な環境の中に身をおくことができたのは、ひとえにこのような三品先生の御教導によるものであったと、今でも深く感謝している。

また学問以外の面で、先生には盆栽作りという特技のあることも、舞鶴へ行つてはじめて知ったことであった。先生のお宅の庭には多数の盆栽の鉢が並んでおり、この盆栽についての講義がはじまると、先生はほんとに楽しそうで、止まるどころを知らないという風であった。一本の松の枝をひねりながら、この枝は何年先にはこうなると、私達にとつては気の遠くなるような遠い先の細かい計算が立てられていた。また植物を上手に育てる根本はやはり愛情である。木や草や花も、育ててくれる人の愛情をよく知っているとすることも常に話しておられた。

先生が豪放磊落ともいふべき性格の一面で、盆栽の育成にみられるような周到な緻密さをもっておられ

たことは、先生の御研究の上にもよくあらわれていると思われるし、また木や草や花にそそがれた愛情は、またそのままに、先生が私達に与えられた温かい愛情であつたと思う。私達にそそがれる先生の眼ざしには、いつも温かさがただよっていた。先生は決して能弁ではなかったけれども、話題は広く、しかもその話には明るさと温かさがあり、先生の在るところ常に明るい笑いがあつた。自然、先生の周囲には多くの後輩が集まり、また先生はこれらの後輩を温かく迎え教導された。このような人徳の上からも、先生は得難い方であつたと思う。

先生の学問の分野の広がつたことも周知のことである。最も専門とされた朝鮮および日本の古代史、神話学のほか、民族学・民俗学・仏教史・神道史など広い範囲にわたる御研究があり、また古文書にも関心をもち、かつて『影印古文書選』を編修刊行され、近くは『今堀日吉神社文書』の出版も計画されていた。このような学問の広さにおいてもまた先生は稀にみる得難い学者であつた。この先生の広い分野にわたる長年の御研究の成果は、近時『三品彰英論文集』（全六巻）としてまとめられ、昭和四十五年から逐次刊行されつゝあつたが、その刊行の終らないうちに逝去されたことは、先生としてもお心残りであつたこととお察しする。しかし先生の遺された数々の貴重な御研究は、今後もながく日本の歴史学界をみちびく偉大なる業績として生きつづけて行くことは間違いない。

先生が亡くなられて早や一年余、先生が仏教大学の史学科研究室で、パイプをくゆらしながら御令嬢草子さんと一緒に『三品彰英論文集』の原稿を作成しておられたお姿が、つい昨日のことのように憶い起され、あと数年なりともお元気でいてほしかったと、誠に哀惜の念に堪えない。ここに先生を追憶する文を草し、改めて御冥福をお祈りする次第である。

（昭和四十八年二月十五日記）

三品彰英先生略歴

明治三五年七月五日 滋賀県野洲郡小津村三宅（現、守山市三宅町）蓮生寺において誕生。

明治四一年 真宗大谷派本願寺にて得度。

大正一〇年七月 真宗京都中学校卒業。

大正一四年三月 第三高等学校文科乙類卒業。

昭和三年三月 京都帝国大学文学部史学科国史専攻卒業。卒業論文「帰化氏族の研究」

同年 四月 京都帝国大学大学院入学。研究題目「朝鮮史の研究」

同年 七月 海軍機関学校教授嘱託。

同年 一二月 任海軍教授、補海軍機関学校教官。

昭和六年四月 京都帝国大学文学部講師。爾後、昭和三六年三月まで、ほぼ連年出講。

昭和 一二年二月 アメリカに研究出張。エール大学大学院人類学科において visiting professor として研究。昭和

和一三年二月帰国。

昭和 一七年二月 大谷派本願寺より蓮生寺任職に任命される。

昭和 二〇年一〇月 依願免本官。同月、大谷大学講師。

昭和 二一年五月 大谷大学教授。

昭和 二二年一月 京都大学より文学博士の学位を授けられる。主論文題目「朝鮮古代研究第一部、新羅花郎の研究」、副論文題目「神話と文化境域」

昭和 二五年四月 天理大学講師（至逝去）

昭和 二七年四月 奈良女子大学講師（至三〇年三月）

同年 同 月 竜谷大学講師（至二九年三月）

同年 同 月 同志社大学講師（至三〇年三月）

三品彰英先生を憶う

昭和三〇年三月
同 年 四月
昭和三五三年三月
同 年一〇月
昭和四三年三月
昭和四五年四月
昭和四六年八月
同 年一二月一九日

大谷大学教授を依願退職。四月、同大学講師（至三五年九月）
同志社大学教授。
同志社大学教授を依願退職。四月、同大学講師（至逝去）
大阪市立博物館長。
大阪市立博物館長を依願退職。
仏教大学教授。
発病。京都府立大学病院に入院。
午後三時四〇分、後腹膜腫瘍のため逝去。享年六十九歳。

三品彰英先生著作目録

単 行 本

建国神話論考	目 黒 書 店	昭和二・一〇
朝鮮史概説	弘 文 堂	〃 一五・八
日鮮神話伝説の研究	柳 原 書 店	〃 一八・六
△訳著▽フィリッピン民族誌（横田健一共訳）	三 省 堂	〃 一八・六
朝鮮古代研究 第一部 新羅花郎の研究	三 省 堂	〃 一八・二
△増補▽上世年紀考	養 徳 社	〃 二三・四
蓮如上人伝序説	永 田 文 昌 堂	〃 〃・〃
神話と文化境域	大八洲出版株式会社	〃 二三・一〇
△改訂版▽朝鮮史概説	弘 文 堂	〃 二七・一〇
中山悦治翁伝	中山悦治翁伝編纂委員会	〃 二九・三

北鮮と南鮮

日本書紀日韓開
係記事考証(上)

大阪——昔と今

大阪府の文化財

『日本文化財大系』8 郷土の文化財 大阪・滋賀

日本書紀研究 第一冊〜第五冊

邪馬台国研究総覧

日本神話論(三品彰英論文集第一卷)

建國神話の諸問題(〃 第二卷)

神話と文化史(〃 第三卷)

増補日鮮神話伝説の研究(〃 第四卷)

ハーバード・燕京・同志社東方文化

吉川弘文館

保育社・編著

昭和三二・六
〃 三七・一一
〃 三九・一二
〃 四一・一〇

編 著

創 元 社

平 凡 社

〃 〃 〃

〃 〃 〃

昭和四五・四
〃 四五・七
〃 四六・二
〃 四六・九
〃 四七・四

論 文

日鮮古代仏教の一考察(上)

〃 (下)

山 楽 の 襖 絵

安土と邪蘇教

中世社寺領の研究

長 講 堂 領

伝説蝦蟇のこと

新羅の奇習花郎制度に就いて

〃 (一) (二)

歴史と地理 一九一五

〃 一九一六

史蹟と古美術 一一一

〃 一一五

智 山 学 報

史蹟と古美術 二一二

史蹟と古美術 三一四

歴史と地理 二五一

〃 二五十二

昭和 二・五

〃 二・六

〃 三・八

〃 三・一二

〃 三・九

〃 四・二

〃 四・一〇

〃 五・一

〃 五・二

三品彰英先生を憶う

地主権現に因んで

新羅の奇習花郎制度に就いて (三)

〃〃 (四)

〃〃 (五)

中将姫と役の行者

新羅の奇習花郎制度に就いて (六)

新羅の姓氏について

橋姫神社と県神社

新羅の奇習花郎制度に就いて (七)

〃〃 (八)

〃〃 (九)

〃〃 (二)

日鮮関係伝説の二、三に就いて

脱 解 伝 説

天之日矛帰化年代攷

かぐや姫の本質に就いて (上)

〃〃 (下)

布都之御魂考 (一)

古代朝鮮に於ける 王者出現の神話と儀礼に就いて (一)

布都之御魂考 (二)

古代朝鮮に於ける 王者出現の神話と儀礼に就いて (二)

布都之御魂考 (三)

史蹟と古美術 四一三

歴史と地理 二五—四

〃〃 二五—六

〃〃 二六—一

史蹟と古美術 五一—

歴史と地理 二六—三

史 林 一五—四

史蹟と古美術 五一—四

歴史と地理 二六—五

〃〃 二六—六

〃〃 二七—一

〃〃 二七—三

〃〃 二七—六

青丘学叢 五

〃〃 七

日本文学 二—六

〃〃 三—三

青丘学叢 一〇

史 林 一八—一

青丘学叢 一一

史 林 一八—二

青丘学叢 一二

昭和 五—三

〃〃 五—四

〃〃 五—六

〃〃 五—七

〃〃 五—七

〃〃 五—九

〃〃 五—一〇

〃〃 五—一〇

〃〃 五—一一

〃〃 五—一二

〃〃 六—一

〃〃 六—三

〃〃 六—六

〃〃 六—八

〃〃 七—二

〃〃 七—六

〃〃 七—八

〃〃 七—一

〃〃 八—一

〃〃 八—二

〃〃 八—四

〃〃 八—五

神代より人代へ

古代朝鮮
に於ける 王者出現の神話と儀礼について

(三)

天孫降臨神話異伝攷 (上)

(下)

天之日矛と田道間守

新羅花郎の源流とその発展

〃 〃 (一) (二) (三)

久麻那利考 (上)

〃 (下)

著登名義考

古代朝鮮 祭政と穀靈信仰に就いて

朝鮮の 茶道

古代朝鮮 祭政と穀靈信仰に就いて

鮮の 祭政と穀靈信仰に就いて

盆踊 私考 (一) (二) (三)

〃 〃 (一) (二) (三)

古代朝鮮の四天王像

米国文化人類学界案内記

東洋神話学より観たる日本神話

三品彰英先生を憶う

歴史と地理 三一六

史 林 一八一三

歴史と地理 三三一五

〃 〃 三三六

史蹟と古美術 一三四

史学雑誌 四五一一〇

〃 〃 四五一一一

青丘学叢 一九

〃 〃 二〇

ドルメン 四一八

史 林 二一一

茶道全集(創元社) 四

史 林 二一一二

史学雑誌 四七一六

史 林 二一一三

旅と伝説 八七

〃 〃 八一九

夢 殿 一六

〃 〃 八一一〇

民族学研究 四一四

理想 一〇六

昭和 八・六

〃 八・七

〃 九・五

〃 九・六

〃 九・一〇

〃 九・一〇

〃 九・一一

〃 九・一二

〃 一〇・二

〃 一〇・五

〃 一〇・八

〃 一一・一

〃 一一・三

〃 一一・四

〃 一一・六

〃 一一・七

〃 一一・七

〃 一一・九

〃 一一・一〇

〃 一一・一〇

〃 一三・一〇

〃 一五・一

新羅と高句麗

対馬の天童伝説

満鮮諸族の始祖神話に就いて (一)

薩藩の兵児二才に就いて

満鮮諸族の始祖神話に就いて (二)

朝鮮史 (三)

朝鮮史

満鮮民族の感生型始祖神話

満鮮史の国史的展開

史実と考証

満鮮地帯の歴史

中国史籍に現われた古代日本

宗祖から蓮師へ

穀豊儀礼と神話 (一)

〃 (二)

高句麗主都考

日本の黎明

『魏志』倭人伝 (本文校合)

親鸞のいわゆる護国思想について

『魏志』倭人伝の読み方

日鮮共通の原始政治形態

大陸の情勢とヤマト国家

満鮮小考

紀元二千六百年記念史学論文集

神道研究 二一四

史 林 二六—四

民族学研究 七—四

史 林 二七—一

〃 二七—二

支那歴史地理大系 六

民族学研究 新—一六

史学雜誌 五四—七

〃 五五—一

世界史講座 四

日本古代社会 一

大谷学報 二九—二

〃 二九—三

〃 二九—四

朝鮮学報 一

京大日本史 一

大谷史学 一

仏教史学 二—四

大谷史学 二

新日本歴史「先史及び古代」

〃 「〃」

朝鮮学報 四

昭和一六・七

〃 一六・一〇

〃 一六・一〇

〃 一六・一二

〃 一七・一

〃 一七・四

〃 一八・四

〃 一八・六

〃 一八・七

〃 一九・一

〃 一九・五

〃 二二・六

〃 二四・二

〃 二五・五

〃 二五・九

〃 二六・五

〃 二六・五

〃 二六・一一

〃 二六・一二

〃 二八・二

〃 二八・二

〃 二八・二

〃 二八・三

三国史記高句麗本記の原典批判
天ノ岩戸かくれの物語 (一)

〃 (二)
〃 (三)

高句麗の五族について

朝鮮における仏教と民族信仰—仏教の受容形態—
教義と宗儀の実践

朝鮮の新嘗

天ツ神族・国ツ神族と双分組織

ヨンドン神小考—脱解伝説の側面—

出雲国ゆずり神話について—その歴史的再構成—

麻立干の原義を尋ねて

古事記と朝鮮

古代のムラ

日本書紀日韓関係記事考証(崇神・垂仁紀)

文化史管見

日本書紀日韓関係記事考証(神功即位前紀)

神社と現代思想

朝鮮民俗学—学史と展望

今堀日吉神社文書 (一)

加羅諸国小考

—神功紀の加羅七国平定記事について—

三品彰英先生を憶う

大谷大学研究年報 六

神道史研究 二—一

〃 二—二

〃 二—三

朝鮮学報 六

仏教史学 四—一

親鸞聖人論攷 一

新嘗の研究(にひなめの研究会編)

史 林 三八—六

朝鮮学報 一〇

民族学研究 二—一二

朝鮮学報 一三

古事記大成 五

日本民族と文化(講談社)

朝鮮学報 一四

国史論集(京都大学文学部説史会)

文化学年報(同志社大学文学部文化史学科)

神道史研究 八一—

日本民俗学大系 一

文化史学 一五

西田先生頌寿記念 日本古代史論叢

昭和二八・二—

〃 二九・一

〃 二九・四

〃 二九・七

〃 二九・八

〃 二九・九

〃 三〇・五

〃 三〇・一

〃 三一・一二

〃 三二・

〃 三三・九

〃 三三・一二

〃 三四・一〇

〃 三四・一〇

〃 三四・一〇

〃 三四・一一

〃 三四・一二

〃 三五・一

〃 三五・四

〃 三五・一〇

〃 三五・一二

新羅の浄土教—三国遺事浄土教關係記事註解

今堀旧吉神社文書 (二)

百濟記・百濟新撰・百濟本記について

日韓伝承文化の比較 —穀靈信仰に連関して—

骨 品 制 社 会

日 本 神 話 論

日本書紀所載の百濟王曆

古代日鮮の文化關係のひとつま

継体紀の諸問題

高句麗王曆の—こま—百濟王曆の問題に連関して

民族学から見た倭人伝

婦化人の神話

日本国号考

朝鮮における封建制度

銅 鐸 小 考

天ノ日矛の伝説 —神功皇后伝説考その一—

大和建国について

日本建国神話の構想

大 和 平 定 —建国伝説の意味するもの—

神功皇后の系譜と伝承 —イヅシ族とオキナガ氏—

聖徳太子の任那対策

塚本博士頌寿記念仏教史学論集

文化 史 学 一六

朝 鮮 学 報 二四

韓来文化の後栄・中巻

古代史講座 第七卷

岩波講座日本歴史 二三・別卷二

日本書紀研究 一

アシア文化 二—二

日本書紀研究 二

朝 鮮 学 報 三七・三八合併特輯号

シンポジウム邪馬台国

日本文学の歴史・1 神と神を祭る者

聖徳太子研究 三

末永先生
古稀記念 古代学論叢

朝鮮学報・四九 中山正善先生記念号

日本書紀研究 三

仏教大学学報 一八

神道史研究 一七—四

日本書紀研究 四

五

聖徳太子論集

昭和三六・一一

〃 三六・一一

〃 三七・七

〃 三七・

〃 三八・三

〃 三九・一

〃 三九・九

〃 四〇・

〃 四一・一

〃 四一・一

〃 四一・八

〃 四二・

〃 四二・九

〃 四二・一〇

〃 四三・一〇

〃 四三・一一

〃 四四・三

〃 四四・七

〃 四五・一

〃 四六・一

〃 四六・一一